



Title	タイポグラフィの美学
Author(s)	高安, 啓介
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 94-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53594
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイポグラフィの美学

高安啓介／愛媛大学

美学という学問分野は、18世紀に感性論として成立し、19世紀にとくに芸術の哲学として発展をとげた。20世紀になって、感性・芸術・美という三位一体が崩れるにつれて、美学の仕事はいよいよ自明でなくなっている。しかし少なくとも、今日の美学の仕事として、二つ重要なことが考えられる。一つは、アートやデザインについて論じるための感性語への反省であり、もう一つは、視覚伝達への反省である。美学がもともと18世紀にバウムガルテンによって「感性の認識の学」として創始されたならば、今日の美学は、これら二つの仕事を通して、「感性の交通の学」になろうとしている。そして、美学のこうした関心にとって、タイポグラフィはきわめて重要な分野となるだろう。なぜなら、タイポグラフィは、活字をあつかう造形分野として、視覚伝達の王道ともいえるからである。しかもタイポグラフィ自体がすでに、活版印刷術という技芸から脱却して、活字使用への反省をさらに深めることで、「感性の交通の学」となろうとしている。本発表は、こうした状況を受けて、美学がタイポグラフィにどう接近できるかを提示するものである。以下にその鍵となるポイントをあげる。

構成の理念

タイポグラフィは、活字をあつかう造形分野としては、書体と組版という二つの側面をもつ。ただし、タイポグラフィの仕事は、本来の意味からすると、書体設計にとどまらず、活字を組むこととしての組版にゆきつくものである。そのことは、書体デザイナーがかな

らずしもタイポグラファーとみなされないことから明らかである。したがって、タイポグラフィの語を、強いて日本語にするならば、組版となるだろう。英語では、組版のことを typesetting とも composition ともいう。すなわち、タイポグラフィの本質は、一言でいうと、構成 composition にほかならない。

タイポグラフィとは何かということは、もちろん、印刷技術と切り離して考えることはできない。タイポグラフィは、もともとは、活版印刷そのものだった。西洋の活版印刷は、グーテンベルクからの歴史をもつが、20世紀になっても金属活字を組むことは続いていた。20世紀前半、前衛美術家たちがタイポグラフィの分野にいわば新規参入したことで、タイポグラフィは植字工の仕事から解放されたが、タイポグラフィは、活版印刷をなお前提するかぎり、活字という物体の構成につながれていた。20世紀後半、光学にもとづく写植が実用化され、コンピュータによるDTPが本格化することで、タイポグラフィはようやく表面の構成となった。

形象の否定

タイポグラフィは、造形の一分野として、形象の制作にかかわりながら、形象の否定をはらんでいる。すなわち、活字の形象について考え、活字をもちいて版面のうえに形象をつくるが、絵を描くことのように目に見えるものの模像をつくるのではない。さらにいうと、タイポグラフィにとって、画像をあつかうこともまた、本来の仕事とはいえない。たしかに、タイポグラフィは、実際のところ、

編集と印刷にかかわる仕事として、画像の使用についても考えてきた。しかしだからこそ、ラジカル・タイポグラフィというものを想定したい。すなわちそれは、活字のみをもちいて、構成の力のみをたよりに、版面のうえに形象をつくらうとする試みであり、図解したほうが分かりやすいと思われることでも、安易に図解にたよらないものである。ラジカル・タイポグラフィは、このかぎり、形象の否定をことさら自覚したものでもある。なお、こうしたものを想定する理由は、現代における形象の氾濫にたいして反省をうながすためであり、タイポグラフィの可能性をより引き出すためでもある。

音楽の原理

タイポグラフィの二つの基本性格が明らかである。一つは、構成のありかたが問われる分野であること、もう一つは、形象の制作にかかわりながら、形象の否定をはらんでいることである。たしかに、タイポグラフィにおける構成とは、組版 composition のことであって、音楽の作曲 composition を連想させるところがある。そしてまた、タイポグラフィと同じように、音楽もまた、目に見えるものの模像ではありえない。タイポグラフィが音楽によく似ていることは、20世紀のそれぞれ分野の発展からも裏づけられる。1920年代にいわれだした新タイポグラフィ Neue Typographie は、左右対称の文字組から解放されたことで、組版 composition のさまざまな可能性を見出していったが、これに対応するのは、ドイツ語でいう新音楽 Neue Musik である。新音楽は、1910年前後にシェーンベルクが調性から離脱してからの前衛音楽のことをいう。音楽において調性とは、ト長調のなかでト音が中心をなすように、中心音にすべて音が従属している状態のことを

いうが、新音楽もまた、調性から離脱することで、作曲 composition のさまざまな可能性を試すことができた。さらにまた、タイポグラフィから音楽から触発されることもあった。そのことは、興味深いかたちでは、スイス・タイポグラフィを代表するミュラー＝ブロックマンとルーダーの二人の仕事にみることができる。

構成と形式

タイポグラフィにおいて構成とは、活字を組む行為のことでもあれば、組んだ結果としての活字どうしの関係のことでもある。そして、タイポグラフィの形式とはその後者のこと、すなわち、活字どうしの関係にほかならない。たしかに、近代主義のあらゆる造形において、構成がとくに強調されれば、形式もまた強調されてきた。すなわち、両者の概念はたがいに通じ合うということである。したがって、タイポグラフィの構成のありかたを問うのは、タイポグラフィの形式論である。そして、近現代のタイポグラフィの形式について論じるときには、二つの対立図式について反省することが求められる。一つは「対称」と「非対称」との対立であり、もう一つは「均質」と「不均質」との対立である。

構成のユートピア

構成のユートピアについて考えることは、デザイナーにとって有意義なことにちがいない。日本語タイポグラフィにおいて、日本語の文字の多様さをうまく生かすことがもめられるように、私たちにとって、構成のユートピアとは、多様なものが個性を失わずに関係し合っている状態のことであると考えてみたい。